

『ウルフ・ソレント』 上下巻

鈴木聡訳
国書刊行会

鈴木聡氏が新しい訳書を出版された。鋭利かつ博識な批評家であるだけでなく極めて多産な翻訳家であり、この度のジョン・クーパー・ポワイズ著『ウルフ・ソレント』のような小説作品のみならず、フレデリック・ジェイムソン、テリー・イーグルトン、あるいはガヤトリ・チャクラヴォーティー・スピヴァックなど、いわゆる批評理論にかかわる英米の著書の翻訳を鈴木氏が多数出版されてこられたことは周知の事柄でもあり、今更御紹介するには及ばないのかもしれない。鈴木氏が二十年あまりにわたって、文学のみならず音楽、批評といった多様なジャンルで活躍されて、その都度時代の最先端をゆく成果を挙げられてきたこともまた周知のことだろう。この度の御翻訳は、かつてやはり鈴木氏が訳されたイーグルトンの『聖者と学者の国』のようにいわば学者的な小説作品で、日本での紹介が待たれていた。そうした作品をさりと訳してしまわれるところに、鈴木氏の御本領がある。

『ウルフ・ソレント』は、従来日本では一般にそれほど知られることのなかったJohn Cowper Powys(1872-1963)による

タイトルと同名の主人公とその若妻ガーダをめぐるプロットを中心とした長篇小説である。出版された一九二九年は、英米におけるいわゆるモダニズムの文芸思潮が波の頂点のひとつを迎えつつあった年で、イギリスではヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ夫人』が一九二六年、『燈台へ』が一九二七年。D.H.ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』が一九二八年に出版され、アメリカ文学ではウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』やヘミングウェイの『武器よさらば』とトマス・ウルフの『天使よ故郷を見よ』が同年に出版されている。これらの作品がすでに日本語に訳出されて広く知られているのにたいして、『ウルフ・ソレント』は鈴木氏の御翻訳が初訳となることは驚きだ。すでにR.P. Gravesの『The Brothers Powys(1983)』などの研究によってPowysと二人の兄弟たちを再評価しようという試みが近年もなされているし、研究社の『英米文学辞典』でもJohn Cowperは二人の兄弟たちとともに写真入りで紹介・記述されているから、作家としてのJohn Cowperが専門家のあいだで知られていなかったわけではないはずだからだ。

そうした経緯は、『ウルフ・ソレント』や代表作とされるA Glastonbury Romance(1933)が持つ作品としての特質や、イギリスを舞台として創作するイギリス作家でありながら生涯の多くをアメリカで過ごしたなど、John Cowperの作家としてのいくぶん特殊な、折衷的とも言える経歴などにも起因しているかも知れない。実際、一八七二年生まれのJohn CowperはJames Joyceよりも十歳年長、D.H. Lawrenceよりも十三歳年上であるにもかかわらず、どちらよりも遅

一九一五年に処女作を発表しているから、時代的に早く生まれ、遅すぎて開花したモダンリストであるにちがいない。作品のありかたそのものが時代性と地域性の両面において作者の経歴と同じく折衷的であり、また評価もそれにあわせてか肯定・否定両面にわかれている。Joyceの作品の実験性とNobokov的なモチーフと設定が、Thomas HardyやD. H. Lawrence、あるいはJane Austenにすら類似した、作者の故郷でもあるサマセットシャー・ドーセットシャーへの帰郷をめぐるリアリステックな作品の枠組みに盛り込まれている。もしJoyce, Nabokovらのように先鋭的にアヴァンギャルドな言語にたいする姿勢が、伝統的にイギリス文学のな限定された舞台におけるエピソードティックな作品構成のなかで、たとえばシェイクスピア作品と積極的にオウヴァーラップする十四章「渦巻く煙」などに現れてくるとすれば、主人公ウルフ・ソレントの意識と「神話体系」と作中名づけられて断片的に作品全体に鑲められる心理小説的な部分は、作品の原理としては個人の意識の相をすで見切ってしまったかに見える多くの同時代の小説作品よりは、Thomas HardyあるいはHenry Jamesなどによる十九世紀小説にて古風ですらあり、同時代作家では自伝的人物を核にエピソードを積み重ねたThomas WolfeやPoyws自身の影響を受けたHenry Millerに近づく。

鈴木氏があとがきに書かれているように、もし「ナシヨナリズムとモダンイズムはともに、旧来の支配体制にたいする意義申し立て」を孕んでおり、そうした「矛盾に直面することが二十世紀に生きた多くの知識人の共有する運命」だったとするならば、「知」にかんする歴史研究のなかでこの作品が持つ意義は大きいに違いない。十九世紀と二十世紀、意識の中心性とその重要性の否定、またそこから生じる「神話体系」や言語システムに基づく作品の構成の可能性、外面と内面の一致の可能性とその否定、リアリズムの可能性とその否定、男性的意識と女性といった一見して顕著な特徴は、モダンと呼ばれる時代性がそうした矛盾に直面してどのような作品を生み出しているのかを、主人公のウルフ・ソレントの背後に潜む作者が実験的に楽しんでいるその結果であるようにも思われるからだ。この作品が作者の旅行の移動先で書き継がれたものであることも、主人公の移動が各所で強調されていることも、あるいは作者がイギリスではなくアメリカにあつて創作を行ったこともおそらくは偶然ではなく、上記のような矛盾に直面する意識としての主人公／作者が意識や体系、個人にとってのノスタルジアをモチーフとする過去／歴史の提示の可能性やファミリー・ロマンスの枠組みを保持しつつ、さらにそれから逃れうる可能性を提示しつつけるために要請されたダイヴァイスなのだ。作者がアメリカ合衆国に親しんだ事実もまたおそらく文学的にも偶然ではない。近親相姦と移動をモチーフとする本作品にそくして、たとえばジル・ドゥルーズによるアメリカ文学論がScott Fitzgerald & Henry Millerの作品にエディパスから逃れる「流れ」を見い出していたことや、D. H. Lawrenceによる『古典アメリカ文学研究』(1923)がアメリカ文学に特徴的な二面性を見い出して、そこにヨーロッパにとっての黙示録的な意味あいを読

み取ったこと、あるいは十九世紀アメリカの「超絶主義者」たちや Walt Whitman が主人公 ウルフ・ソレントの思索と酷似した自我同一性のジレンマに直面してもいること、そして Henry James がそうしたジレンマをヨーロッパとアメリカの関係性において表現していたこと、Henry Miller がおそらくはその正統な後継者であるということなどを思い起こすだけでいい。Ulysses の出版が不可能だったダブリンやロンドンではなく、モダニズムの中心地パリで執筆した Joyce とは逆の立場ではあっても、アメリカは Powys にとつての知的／物理的な滋養の源となっていたはずだ。また、一九五〇年代後半から急速に「ポストモダン」化してゆくアメリカ小説にすら『ウルフ・ソレント』は酷似している。John Barth の初期作品などは『The End of the Road』や『The Weed Factor』などは、『ウルフ・ソレント』と同様の二律背反を作品構成の柱としている。

Nabokov ですら日本での一般の理解は遅かったし、おそらく現在でも限られた範囲でしか読まれてはいないだろう。ある種の「奇書」や「幻想文学」の書き手として理解されて、おそらく現在も Joyce, D. H. Lawrence, Virginia Woolf, Faulkner, Hemingway らと対等なモダニズムの大家として理解されることは少ない。そうした Nabokov 受容の貧しさを嘆く声を外国のモダニズム研究者から聞くことは実は多い。Nabokov が奇書の書き手であると言うならば、『ウルフ・ソレント』の Powys もまた奇書の書き手である。つぎのようなパッセージが突然書き出される小説作品など、わたくしはこれまで目にしたことがなかった。

母はまたテーブルをまわって近づいてきた。だが今度の目的はまえの動作とは大きく違っていた。けれども、どちらの仕草も同じ野蛮な性的衝動に支配されたものであることが彼にはよくわかっていった。(十四章。鈴木氏訳による。)

フロイトがモダニズム期の小説作品に大きな影響力を持っていたことは常識的な知識で、D. H. Lawrence も William Faulkner も、なんらかのかたちで汎性欲論や近親相姦を主要なモチーフとしている。しかし俗流であれなんでもあれ、こうしたリアリスティックな描写の細部が意味不明な性欲論によって強引にかたちづくられるとは驚きだ。同時代作品で、同じく母と息子の関係を扱う D. H. Lawrence の Sons and Lovers にこんなパッセージは絶対になかったと記憶しているし、もちろん Faulkner にもないし、Joyce, Virginia Woolf にもない。美少女ガーダとのからみにあらわれる少女愛や近親相姦といったモチーフが男性中心主義とそれに対する疑問をあらわにしているモダニズム小説に頻繁にあらわれることも常識的だが、『ウルフ・ソレント』の芸術作品としてのありかたも、この作品が必然的であるかのようには巻き込まれているいわば「思想的」なありかたは、このようにある種融合しており、その是非の判断は読者にゆだねられている。そうした奇書ぶりが『ウルフ・ソレント』の楽しみでもあり、同時に作品の完成度にたいする批判にもつながっているのだろう。御翻訳の帯に紀田順一郎氏が

書かれているように、『ウルフ・ソレント』の Powys を知る
ことよって「日本の読書界もようやく国際水準に追いつ
こうとしている」可能性もなくはない。もし翻訳されてい
るかどうかが「国際水準」に大きく貢献するのだとすれば。
そうした理解を求める場合には広く時代的なテクストに精
通する必要があるに違いなく、従来言われてきた以上に興
味深い Powys の作品群を、美学的な範疇を超えて理解しよ
うとする必要があるだろう。

とにかく鈴木氏は、Nobokov のみならず英米の奇書に
通じられた篤学の志でいらっしやるので、訳者御本人が今
後、まさに「国際的」な Powys 研究の成果を生みだされる
ことを期待してもいいかも知れない。おそらくは『ウルフ・
ソレント』のように従来知られることがなかった作品につ
いてこそ、鈴木氏の博識が貴重なものとなるだろうから。
御翻訳はいつもながら清らかな翻訳文体である。長く鈴木氏
を知るものにとつて、こうした御活躍を現在も氏が続けら
れていることが嬉しい。

(加藤雄二)

